

# 春夏秋冬 台湾徒然

第36回

## 故郷に背を向けて

柳本通彦

ジャカルタ——人口1000万を超す、インドネシアの首都である。恒常化した交通渋滞で都市機能は終日麻痺している。

華僑の知人は高級車を走らせながら、ジャワ人の政治家を罵倒し続けている。一方ジャワ人の友人にいわせると、華僑の独善主義のせいだという。人口わずか数パーセントの華僑が国の経済の中核を支配している。

この町に、私は一人の台湾人に会うためにやってきた。しかし、この男は、自分が台湾人であることを公表してくれるなど言わなかった。だからここは仮にOさんとしておこう。

Oさんはインタビューの間、自分は日本人として生まれ、今もなお日本人として生きているということ度を々強調した。ほんとうは、このまま日本

人として死んでいきたいとも言いたかったのだろう。

彼は大正年間の西年に台湾南部で生まれた。まもなく80代の半ばに差し掛かる。足が不自由で杖をついている。

公学校を出たあと旧制中学に通うほどの英才で、健康優良児になるほどの体格に恵まれた。おりからの皇民化教育のなか、Oさんは、自ら志願して戦地に赴く。昭和15年のことである。

中国大陸に連れて行かれた。任務は通訳。目の前にあらわれた敵は同じ顔、同じ言葉の漢人だった。Oさんの話には、スパイという言葉も繰り返され、登場する。具体的にはわからない。しかし同胞からスパイとののしられたことが度々あったのではないかと。

真珠湾攻撃はルソン島上陸時に聞いた。戦線の拡大とともに南下し、ジャ



英雄墓地の日本人戦友を見舞うOさん

ワ島の占領作戦に参加。昭和18年、Oさんは台湾に戻り、台北帝国大学熱帯医学研究所で一年、細菌学とマラリア学を学んだという。そして配属されたのが、防疫給水部だった。

部隊はシンガポールからビルマを経て中国国境近くまで達したあと、南に引き返す。途上、インパール作戦に遭遇。Oさんは、日本の敗戦を確信する。シンガポールにつくとそこは戦勝気分になっていた。

華僑たちに袋叩きにされると思ったOさんは小船を雇って、ジャワ島に渡った。決死の逃避行。これで日本軍からも脱走兵として追われる身になった。無縁無一文からOさんの第二の人生は始まったが、ジャワは独立戦争の真っ最中。Oさんはやむなく義勇軍に参加し、ジャワ東部でオランダとゲリラ戦を戦うことになった。

そうした星霜を経て、六十余年、Oさんはこのジャワで暮らし続けている。実父からは、国民党の特務が見張っているという連絡が来た。だから一度も故郷の家に帰ったことはない。

ジャワ人と結婚し、国籍をとった。今は三女夫婦とともに悠々自適の生活に見える。だからこそ、平和に暮らしたいのだと、私の目に訴えるのである。すでに中華圏もボーダレス化している。過去がばればれば、「漢奸」として世界の華人社会から排斥されるという恐怖に、その大きな身体を縮めるようにして暮らしている。

日本名を記すことは許してくれるかもしれない。しかしそれにどういう意味があるのか。インドネシア残留台湾人元日本兵という長い肩書きをもつ一人の老人が、ジャカルタの喧騒の中を杖をつきながら、故郷に背を向けてひっそりと生きている、その事実の重みこそお伝えしなければならないのではないか。

やなぎもと・みちひこ  
京都市生まれ。99年度「潮賞」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たちの聖戦」(現代書館)「台湾革命」(集英社新書)「明治の冒険科学者たち」(新潮新書)など。最新刊に「ノンフィクションの現場を歩く 台湾原住民族と日本」(かわさき市民アカデミー出版部)